

## 「生前葬」転じて「金婚式」に

今、この原稿をワクワクした気持ちで書いています。先月は結婚45周年という佳節でした。5年後は金婚式の年にあたります。親しかった、またお世話になった方々との楽しい懇談ができるかもしれないからです。夫婦が仲良く健康でいれば誰でも金婚式を迎えるチャンスはあります。ただ、それを実際に祝うかどうかは二人の気持ちや経済状況にもよるでしょう。私は妻ともども健康管理をよくし、それまでしっかり働き、なんとかこの式を楽しく盛り上げていきたいものだと思っています。



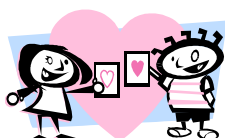
近年、葬儀の多様化に伴い色々な形が生まれていますが、その一つが「生前葬」です。でも、趣旨はわかってもこの言葉にまだ抵抗がある人も多いと思います。そんな最中、先ごろ読んだ本に素晴らしい例が書かれていました。

「人生は65歳からがおもしろい」河村幹夫著 海竜社

著者は1935年生まれ。一橋大学卒業後、三菱商事に36年間勤務のあと多摩大学教授に転職。人生に対する前向きで革新的な視点が目を引きまします。いくつか挙げてみますと：

- 小著は77歳になった私が65歳前後の人生の後輩諸氏に宛てたアドバイスです。
- 健康寿命の平均が男が70.42歳、女が73.62歳。これは人生100年時代に最後の20～30年をどう生きていくのか大きな問題です。
- シニアだからこそ持っている武器。自分たちが長年培ってきた価値観や行動スタイルをその時代の流行などに合わせて反応したり変節せず、確固たる自信を持って保持すべきである。
- 仕事を持ち続ければ、人生の最後まで気力充実した生き方ができる。収入を得るといふ他律的なものではなく「感動こそが報酬」と自律的な内容を意味する。期待する報酬と受け取る額の差額は社会貢献のための寄付と思つたらいい。
- 自分がクリエイティブな発想を持ち、「この指とまれ」とまず旗を掲げて世間に声をかけてみること。
- はつらつシニアを支えている最大の要因は「生き甲斐」で、確固とした人生の目標を持ってその実現に向かっている。
- 「生前葬」とあからさまに言ったら来てくれる人も少なくなるかも・・・そこでこんな案内状を出した。

「古希を迎え、友人の皆さまに感謝申し上げる催しのご案内」



当日はこれまでの人生の中で、最も楽しい、最も納得のいく一日になりました。これだけ多くの人と生きているうちに再会できたことは限りない喜びでしたし、何より納得のいく人生を体験したのでした。

——どれも共鳴できる主張です。実はこの最後の部分をブログで紹介したところ、2カ月近く経過した今もかなりの数のアクセスが続いています。きっと皆さんも関心があるからだと推測しているところです。

正直、もし一家の主が高齢で亡くなった場合、残された家族は葬儀社の手配から参列者

を迎える準備に追われ、故人を偲び悲しんでいる間もありません。亡くなった本人も“主人公”がいないところに弔問を受けるよりも、まだ元気で動ける間に心ゆくまで語り合った方がはるかに有意義ではないかと思うのです。

ということで、ひととき私も「生前葬」に心が動いたこともあったのですが、川村氏の例のように、これまでお世話になった皆さまに心からの感謝の思いを伝えるための集いを持つことになってきました。その時期は 77 歳の喜寿、と考えたけれど、翌年の 78 歳が金婚式にあたる。ならば自分だけよりも二人で皆さまに感謝の思いを伝えたい。さらにその翌年は東京オリンピックの年。自分はボランティア通訳に参加しようとしているので、一番張り切ったちょうど良い時かもしれないからです。



感謝を伝えるのですから費用はすべてこちら負担（来ていただく方が参加しやすくするために若干の会費的なものをいただくことになるかもしれませんが・・・）。そして自分の葬儀の時にはゆっくりと家族・身内のみで偲んでもらいたい。その方が合理的ではないかと思うようになってきたのです。



会場には家の近くにある素敵なホテルを予約し、宴会場の前面には「お世話になった皆さまに感謝を捧げる集い」、後方には「ありがとうございます。皆さまのお陰でここまで来ることができました」との文を掲げる。“披露宴”では演奏会で腕を上げている子供や孫の演奏に自分も加わって盛り上げていく。来てくださった皆さまには、お礼の言葉のほか、それまでにホームページで紹介してきた主な記事と写真を「清水武全集」として編み記念に差し上げる。そうすれば、まさに「それまでの人生の中で最も楽しい納得のいく一日になる」と思うのです。

そしてできればあと 10 年。2030 年の創価学会創立 100 周年まで、人々の幸せと世界平和につながる活動に最大限に貢献し 90 歳で PPK（ピンピンコロリ）もしくは 100 歳で NPO（長生きしポッキリと往生する）とできたら最高、なんて願っているところです。

まさに“見果てぬ夢”を追いかけてきた「東京のドン・キホーテ」の生きざまの最終章ですが、こんな人生があってもよいのではないか——「この指とまれ」で共鳴して下さる方がいらっしやれば嬉しいところですが・・・・・・